

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H03595

研究課題名(和文)大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育

研究課題名(英文)Materializing and Narrating Collective Memories of Calamities and Education for Disaster Reduction

研究代表者

林 勲男 (Hayashi, Isao)

国立民族学博物館・超域フィールド科学研究部・教授

研究者番号：80270495

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 22,000,000円

研究成果の概要(和文)：当初計画していた海外調査は、感染症拡大による多くの制約があったが、時期や期間の見直し、国内調査へ変更するなどして、満足いく成果を得ることができた。国内外の被災地で保存されている災害遺構の現地調査を行った結果、災害の記憶を継承する他の様々な媒体や交流・活動と組み合わせ、災害遺構を「場」にすることこそが、災害の記憶を継承する原動力となることが明らかになった。また伝承施設等での展示も、情報の一方的な伝達ではなく、そこでの様々な交流を図る企画を組み合わせることで、将来の防災・減災に繋がること判明した。防災教育においても、遺構や展示、語り部の講話が有効なものとの知見を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内外の被災地における災害遺構の調査から、それらを持続的に活用する方策を探った結果、災害遺構の持続可能な保存・活用のためには、「媒介者」が果たす役割が大きいこと、また、遺構と災害の記憶を継承する他の様々な媒体や交流・活動と組み合わせることで、建造物としての存在から「場」にすることこそが、災害の記憶を継承する原動力となることが判明した。伝承施設等の展示も、情報の一方的な伝達ではなく、様々な交流を図る企画を組み合わせることで、将来の防災・減災に繋がること判明した。東日本大震災被災地では、災害遺構や災害伝承施設がある場合、地域の語り部活動に場を提供している多くのケースは、先導的事例といえる。

研究成果の概要(英文)：Although there were many restrictions on the originally planned overseas research due to the spread of COVID-19, we were able to obtain satisfactory results by revision of the timing and duration of the research and changing it to domestic ones. As a result of field research in Japan and abroad, it became clear that the driving force for passing on the memory of disasters is to make disaster remains "places" by combining them with various other media, exchanges, and activities that pass on the memory of disasters. It was also found that exhibitions at facilities for the transmission of disaster experience and lessons can lead to disaster prevention and mitigation in the future, not through the one-way transmission of information, but through the combination of various exchange programs at such facilities. The study also revealed the effectiveness of the remains, exhibits, and narratives by storytellers in disaster prevention education.

研究分野：文化人類学

キーワード：災害 津波 地震 集合的記憶 遺構 モニュメント 防災教育 ミュージアム

1. 研究開始当初の背景

大規模災害が発生する度に、二度とこのような災害にあわないために、災害の経験やそこから学んだ教訓を、「風化」や「忘却」に抗い、後世に伝えることの必要性や重要性が声高に言われてきた。そして、災害を語り継ぐ活動が、直接の経験者だけでなく、その後の世代にも受け継がれてきた。さらに、そうした活動を支え、記憶の媒体としての遺構や遺物、新たなモニュメント（記念碑、祈念碑、慰霊碑など）の建立なども各地でおこなわれてきた。災害の語り継ぎや遺構の保存、モニュメントの建立が社会的に注目される一方で、そのための合意形成、財源確保や経費負担の調整、維持管理、人材確保など多くの課題が指摘されてきたにもかかわらず、アカデミズムにおいてはそれぞれの活動やプロセスにおける課題の解決に向けての議論が十分になされてきたとは言い難い。具体的には、これらの活動の必要性や有効性を認めながらも、被災の苦悩や悲痛さを喚起するものとして、反対もしくは距離を置く人びとが少なからず存在することについては、そうした人びとへのアプローチの難しさもあって、なかなかその実態や考え方の変化については不明な部分が大きかった。

災害の記憶を後世の人びとを含めた災害の未経験者へ伝えるという問題を考える時、まずは誰にとっての災害の記憶であり、どのような内容なのを明らかにする必要がある。そして個人の記憶と複数の人びとが共通に持つ記憶との関係、言い換えれば後者の記憶（集合的記憶）が形成されていく過程を具体的に捉えることが必要である。記憶の内容は過去の出来事であり、記憶の研究への社会科学からの貢献は、「過去」は現在という脈絡の中で常に再構築されるものであるということを示した点である。つまり、人間の記憶とは、コンピュータのハードディスク内のデータのように、アクセスするたびに同じ内容が引き出せるのではなく、想起される時点時点で内容に変化が生じやすいという、きわめて状況依存的であることを意味している。さらに集合的記憶の場合は、合意形成のプロセスの中で対立や妥協なども生じ、社会的に時には政治的に構築されていく。現在という社会状況に依存する集合的記憶は、歴史の書き換えや「修正」にも敷衍される問題でもある。すなわち、集合的記憶や「過去」とは、社会の動態に依存した極めて現代的な社会科学の研究対象であり、そうした社会プロセスとして集合的記憶を捉えることの重要性が指摘されている。しかしながら、集合的記憶は時間の中で意味が形成されていく活動プロセスとして理解されるべきと言われるにもかかわらず、過去の出来事に関するダイナミックな集合的記憶の構築プロセスについての詳細な研究は、ほとんど無いに等しい。

災害被災地では、災害の経験やそこから学んだ教訓を、経験していない他所や後世の人びとに伝えようと、被害の痕跡を残す遺構・遺物を保存し、あるいはモニュメントを建立・設置すること、そして自らの災害体験を語り伝えることが、それぞれに意義あるものとして奨励されてきた。東日本大震災被災地の場合は、国の復興予算から一自治体あたり一つの遺構保存への支援があった。しかし、その後の活動の継続性が、こうした保存や建立、語り継ぎによって担保されるわけでは決してなく、建造物は老朽化し、語り部は高齢化していく状況に対して、財政的に、そして人材の育成・確保にいかに対応していくかは、いつか必ず直面する問題である。言うならば、災害発生以降の出来事の記憶だけでなく、それ以前の個人の暮らしや地域コミュニティの在り方の記憶も、やはり未来に継承すべきものとして、活動を長期的に考える必要がある。その基礎データとして、過去に発生した大規模災害被災地の現状を、詳細かつ正確に把握するための調査が必要であり、当初の期待や計画がどのような経過をたどったかの検証が求められている。

そうした状況を踏まえて、本研究では、災害の記憶について、将来の防災に向けて極めて重要と指摘されてきた災害の経験と教訓の継承活動、さらには学校や地域で展開する防災教育との関係に焦点を当てることでアプローチを試みるものである。

2. 研究の目的

本研究では、将来の防災や減災（防災教育）の観点から、被災地に保存された被災構造物（遺構）や遺物、新たに建立されたモニュメント（記念碑、祈念碑、慰霊碑など）そして言葉による語り継ぎに焦点を当てる。自然災害が頻発する日本においては、災害遺構やモニュメントそして体験の語り継ぎ活動は、社会的に注目されると同時に多くの課題が指摘されてきた。しかし、防災・減災という目的達成のための手段・方法としての議論以外は、ほとんど欠落していた。つまり防災以外の分野では、極めてまれにしか研究の対象とはならなかった。そこで、被災地の当事者の記憶とりわけ地域コミュニティにとっての集合的記憶の形成について、遺構やモニュメント、ミュージアムなどでの展示による物的対象化と、口承としての災害体験の語り継ぎを、大規模災害被災地での現地調査に基づいて明らかとし、同時に防災教育をそうした活動との関係において新たに捉え直すことを目的とした。

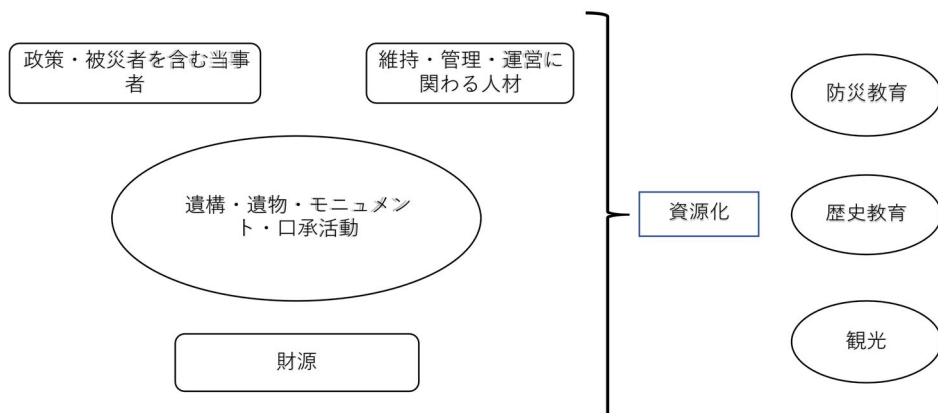
大規模災害の被災地では、遺構や遺物の保存・公開、モニュメントの建立、被災体験の語り継ぎなどによって、被災経験を後世に継承していこうとの活動が生まれる。その一方で、こうした活動は、被災の苦悩や悲痛さを喚起するものとして、反対もしくは距離を置く人びとも存在する。本研究は、大規模災害の集合的記憶を、物を介して保存・伝承（物象化）したり、言葉により語

り継いでいったり(物語化)する活動をプロセスとして、それぞれの地域社会の動態の中で捉える。具体的調査対象としては、1999年の921大地震(集集大地震)の被災地である台湾中部、2004年のインド洋大津波のスマトラ島被災地、2008年の四川大地震の被災地、そして2011年の東日本大震災被災地で、それぞれの地域専門家を中心とした調査を実施した。新型コロナウイルスによる世界的な感染拡大により、渡航が出来なかったり制限が課せられたりしたが、代替となる調査地を選定したり、オンラインでの打ち合わせや情報取得をおこない、各被災地において、災害遺構やモニュメント、語り継ぎ活動が、地域づくりや防災・減災にどのように利活用されているかを比較研究により明らかとした。

我々がこの研究で目指すことは、地域の文化環境や社会関係の中で暮らす人びとが、共通の体験に基づく集合記憶をいかに将来の防災や減災に資するものとして認識し、利活用できるか、またその効果を波及的实践に結びつけるための礎を探ることであった。

3. 研究の方法

本研究では、大規模自然災害に見舞われた地域において、その集合的記憶が定型化されていくプロセスを把握するために、特定の災害遺構やモニュメント、そして関連する物語や歌などの口頭伝承(口承)活動を調査する。それらが、被災地に暮らす人びとの災害の記憶の想起と忘却にいかに関わっているのかを、先行研究や行政文書等の文献調査そして現地でのフィールドワークによる当事者へのインタビューや観察によって把握した。さらには、そうした遺構やモニュメントそして口承が、災害の記憶の継承からさらに展開し、将来の防災・減災のための教育資源として利活用されている実態や可能性についても具体的事例の検証をおこなった。これまでは、災害の記憶の風化・忘却に抗い、防災や減災に役立つものとして無前提に保存・建立されたり、語り継ぎ活動が奨励されたりしてきたが、具体的事例の実態を正確に把握・検証したうえで、比較研究によって事例それぞれの特徴を明らかにし、防災教育教材としての可能性を検討した。



現地調査対象

文献調査と現地での参与観察・インタビュー調査によって、研究のためのデータを収集し、必要に応じて、他の地域のデータと比較して研究を実施した。プロジェクトメンバー間で、それぞれの進捗状況と調査の視点や方法について情報を共有するためのオンライン会議を、プロジェクト期間中に随時、開催した。

4. 研究成果

(1) メンバー個々人が論文や口頭発表によって成果を公開すると共に、本プロジェクトとして、2020年2月に神戸で開催された「世界災害語り継ぎフォーラム2020」の中で、分科会「災害遺構と記憶継承」を開催し、国内外の被災地における災害遺構の事例から災害遺構の持続的な活用のあり方について探った。その結果、災害遺構の持続可能な保存・活用のためには「媒介者」が果たす役割が大きいことを明らかにできた。また、国内外の被災地で保存されている災害遺構の現地調査を行った結果、災害の記憶を継承する他の様々な媒体や交流・活動と組み合わせ、災害遺構を「場」にすることこそが、災害の記憶を継承する原動力となることを明らかにすることができた。伝承施設等の展示も、情報の一方的な伝達ではなく、そこでの様々な交流を図る企画を組み合わせることで、将来の防災・減災に繋がるということが判明した。日本の東北地方太平洋沿岸の東日本大震災被災地では、災害遺構や災害伝承施設がある場合、地域の語り部活動に場を提供しているケースが多いこともわかった。なお、フォーラムの成果は専門雑誌に、複数のメンバーに

よる個別の論考と共に掲載された。

(2) 新型コロナウイルスによる感染症の世界的拡大に伴って、海外調査の実施には多くの困難が発生したが、アチェ津波ミュージアム（インドネシア）、太平洋津波ミュージアム（米国ハワイ州）、東日本大震災津波伝承館（岩手県陸前高田市）の各館長によるウェビナーを開催し、それぞれ機関の現状について理解すると共に今後の活動の連携を図った。

・台湾の集集地震被災地での調査は、2019年度には2度の現地調査を行ったが、新型コロナウイルス感染症の拡大によって継続的な現地調査が困難となったため、日本国内を中心とする事例調査に切り替えた。2018年9月に発生した北海道胆振東部地震の被災地厚真町は集集地震同様に大規模な土砂災害による被害を受けたため、将来的な国際比較を念頭に置いた調査を行った。学校においては心のケアとセットの防災教育の取り組みが行われているほか、教員や被害の軽い地域の児童生徒を対象にした現地学習が実施されるようになるなど、時間の経過と共に防災教育の取り組みが進展する様子が確認された。

(3) インド洋津波災害被災地であるスマトラ島のバンダアチェ（インドネシア）の調査も、コロナ禍による渡航制限のために調査のプランクはあるものの、3名のメンバーが災害発生後の12月26日を挟んだ期間に現地に滞在し、犠牲者の追悼式典の様子、津波災害に関わる施設や場所を訪れる観光の実態、災害記憶の継承範囲が直接被災地から間接被災地にまで年々拡大しており、追悼式典の開催地もそれに沿って移ってきていることを把握した。また、津波についてはその科学的な発生メカニズムや防災対策を理解しつつ、イスラム教の教義に則って、津波は神の介入により生じたとも考えられ、人智を超えた神の計画の中に位置づけられるものの、人々はその災害をアチェの歴史の中に位置付け、意味を見出していたことを明らかとした。

(4) 2011年の東日本大震災の被災地の一つで、多くの子どもたちが犠牲となった大川小学校のケースについては、複数の集合的記憶とそれに基づく複数のナラティブが形成されている実態を把握した。訪問者たちはそうした状況に疑問を抱き、そのことが訪問者相互や現地の語り部たちとの対話に結びついていることが明らかとなった。情報を持つ者から持たざる者へ、ある日は体験者から非体験者へという一方向的なコミュニケーションではなく、相互的な、時には相補的なコミュニケーションを成立させ、新たな学びの場を形成していることを把握した。

(5) 海外調査は、感染症の世界的な拡大によって、渡航制限などのため当初計画の遂行には困難が生じてしまったが、より長い時間経過の中での災害経験や教訓の伝承状況を把握するために、日本国内で発生した歴史災害被災地の状況を調査した。1703年の元禄地震津波被災地である千葉県房総半島太平洋岸と、1925年の兵庫県北部を襲った北但馬地震の被災地にて、祈念（記念）碑や追悼行事に関する現地調査と資料調査を実施し、学術誌掲載の論文や口頭発表、データベース上のデータとして公開した。

<参考文献>

Journal of Disaster Research Vol.16, No.2 (Special Issue on Disaster Storytelling, in Commemoration of 2020 TeLL-Net Forum, Kobe, Japan) .

人と防災未来センター 2021 「調査研究レポート Vol.46 (2020 世界災害語り継ぎフォーラム 災害の記憶をつなぐ)」

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 石原 凌河	4. 巻 28
2. 論文標題 阪神・淡路大震災25年からの教訓の伝承に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 21世紀ひょうご	6. 最初と最後の頁 74-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原 凌河	4. 巻 79(7)
2. 論文標題 災害と記憶：災害遺構による記憶継承のための手がかり	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 運輸と経済	6. 最初と最後の頁 48-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 定池 祐季	4. 巻 14
2. 論文標題 北海道胆振東部地震の支援現場の変化 厚真町に通い続けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 震災学	6. 最初と最後の頁 76-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤 千恵、チュット デウィ	4. 巻 4(2)
2. 論文標題 ムスリム社会におけるダークツーリズム アチェ津波観光における解釈の多様性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 金沢星稜大学人文学研究	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤 千恵	4. 巻 34
2. 論文標題 津波観光と観光者にとっての津波－2004年インド洋津波被災地を訪れる人々の津波の解釈－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第34回日本観光研究学会論文集	6. 最初と最後の頁 441-444
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fukuda, Yu, Sebastien Boret	4. 巻 -
2. 論文標題 Theodicy of Tsunami: A Study of Commemoration in Aceh, Indonesia.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Nabil Chang-Kuan Lin (ed.), Exploring Religio-cultural Pluralism in Southeast Asia: Intercommunion, Localization, Syncretisation and Conflict.	6. 最初と最後の頁 227-242
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sato, Shosuke, Anawat, Suppasri, Sebastien Penmellen Boret, Nakagawa M. and Fumihiko Imamura	4. 巻 273(1)
2. 論文標題 Archiving Disaster Remains: The Case of "Sasanao Factory" in Yuriage Village, Natori City, Miyagi Prefecture	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 IOP Conference Series: Earth and Environmental Science, Proc. of 11th Aceh International Workshop and Expo on Sustainable Tsunami Disaster Recovery, AIWEST-DR 2018	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Imamura, Fumihiko, Boret Sebastien Penmellen, Suppasri Anawat, Muhari Abdul	4. 巻 1
2. 論文標題 Recent occurrences of serious tsunami damage and the future challenges of tsunami disaster risk reduction	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Progress in Disaster Science	6. 最初と最後の頁 227-242
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pdisas.2019.100009	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shibayama A., Boret S.	4. 巻 273(1)
2. 論文標題 Transforming the Archives of the Great East Japan Earthquake into Global Natural Disaster Archives	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 IOP Conference Series: Earth and Environmental Science	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1088/1755-1315/273/1/012039	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂口 奈央, 佐藤 翔輔	4. 巻 Vol.14
2. 論文標題 検証：震災遺構のあり方を巡る合意形成過程	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 震災学	6. 最初と最後の頁 150-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阪本 真由美	4. 巻 55
2. 論文標題 災害の記憶の展示をめぐる考察－阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターの展示より	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 展示学	6. 最初と最後の頁 61-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原 凌河	4. 巻 53(3)
2. 論文標題 災害遺構の価値構成に関する研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 都市計画論文集	6. 最初と最後の頁 823-829
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11361/journalcpj.53.823	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 門倉 七海、佐藤 翔輔、今村 文彦	4. 巻 -
2. 論文標題 仙台市沿岸部の震災復興メモリアル施設が来訪者の防災意識・知識へ及ぼす影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 平成30年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集 (CD-ROM)	6. 最初と最後の頁 2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡 正子	4. 巻 153
2. 論文標題 宗族社会における女性の役割－金門珠山集落を事例として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 愛知大学国際問題研究所紀要	6. 最初と最後の頁 71-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 齋藤 千恵	4. 巻 3(1)
2. 論文標題 インドネシアにおける津波観光 アチェにおける今日のムスリム像の創造	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 金沢星稜大学人文学研究	6. 最初と最後の頁 43-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Boret, Sebastien Penmellen, Akihiro Shibayama	4. 巻 29
2. 論文標題 The roles of monuments for the dead during the aftermath of the Great East Japan Earthquake	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal of Disaster Risk Reduction	6. 最初と最後の頁 55-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ijdrr.2017.09.021	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山 明寛、北村 美和子、ボレー セバスチャン、今村 文彦	4. 巻 2(3)
2. 論文標題 東日本大震災の事例から見てくる震災アーカイブの現状と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 282-286
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24506/jsda.2.3_282	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山 明寛、ボレー セバスチャン	4. 巻 2(4)
2. 論文標題 東日本大震災アーカイブの概要と総論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 342-346
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24506/jsda.2.4_342	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤 千恵 (共著)	4. 巻 33
2. 論文標題 ダークツーリズム論における死の他者性ーインドネシアの津波観光と死の解釈ー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 第33回日本観光研究学会全国大会学術論文集	6. 最初と最後の頁 329-332
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 勲男	4. 巻 161
2. 論文標題 東日本大震災以降の災害研究 人類学と他分野との協働に向けて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 民博通信	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 16件）

1. 発表者名 阪本 真由美
2. 発表標題 1925年北但大震災と日本の防災教育
3. 学会等名 歴史地震研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石原 凌河
2. 発表標題 災害遺構と記憶の継承
3. 学会等名 2020世界災害語り継ぎフォーラム（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阪本 真由美
2. 発表標題 災害の記憶継承とローカルコミュニティ
3. 学会等名 2020世界災害語り継ぎフォーラム（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Saito, Chie
2. 発表標題 Preserving Disaster Memories: Tsunami Tourism in Indonesia 15 years after the Indian Ocean Tsunami
3. 学会等名 The 2nd Critical Tourism Studies Asia-Pacific Conference（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Boret, Sebastien
2. 発表標題 The Temporality of Disaster Landscapes: Des Lieux de Memoire for the Dead of the 2011 Tohoku Earthquake
3. 学会等名 International Workshop on Materialities and Emotions in Times of Disasters (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Boret, Sebastien
2. 発表標題 Social lives of tsunami walls in japan: concrete culture, social innovation and memory of coastal communities
3. 学会等名 AIWEST-DR 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hayashi, Isao
2. 発表標題 Introduction to the session 'Disaster Remains and Passing-on of Memories'
3. 学会等名 2020 International Forum on Telling Live Lessons from Disasters (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阪本 真由美
2. 発表標題 1925年北但大震災の記憶継承に関する研究－兵庫県城崎町田結の事例より
3. 学会等名 日本災害復興学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石原 凌河
2. 発表標題 災害遺構の貨幣価値評価に関する研究
3. 学会等名 2018年度日本建築学会全国大会（東北）学術講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松岡 正子
2. 発表標題 宗族社会中的女性機能研究-以金門県珠山集落的女性為例
3. 学会等名 亚太区域発展中的厦金角色学術研討会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松岡 正子
2. 発表標題 爾蘇蔵族のJ0与羌族の白石－遷徙伝説的記憶与再生
3. 学会等名 中央社会学院・中央民族大学民族学与社会学学院主催「漢蔵羌 文化交流史研討会および第三屆多視角蔵羌彝走廊研討会」（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤 千恵
2. 発表標題 ダークツーリズム論における死の他者性 インドネシアの津波観光と死の解釈
3. 学会等名 日本観光研究学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Boret, Sebastien
2. 発表標題 Aceh 's Memorial SITES for the dead of the 2004 tsunami
3. 学会等名 AIWEST (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shibayama, Akihiro and Sebastien Boret
2. 発表標題 Transforming the Archives of the Great East Japan Earthquake into Global Natural Disaster Archives
3. 学会等名 AIWEST (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sato, Shosuke、Anawat Supprasi、 Sebastien P. Boret、 Masaharu Nakagawa and Fumihiko Imamura
2. 発表標題 Archiving Disaster Remains: The Case of Sasano Factory in Yuriage Village, Natori City, Miyagi Prefecture
3. 学会等名 AIWEST (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fukuda, Yu and Sebastien Boret
2. 発表標題 Theodicy of Tsunami: A case study of commemoration in Aceh
3. 学会等名 International Conference of Southeast Asian Cultures and Religions (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Boret, Sebastien
2. 発表標題 Preserving, Learning and Transmitting Experiences from the 2011 Tohoku Earthquake to enhance Disaster Risk Reduction
3. 学会等名 Global Policy on Disaster Risk Reduction and Management for Sustainable Preservation Heritage, UNESCO, Paris (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Boret, Sebastien
2. 発表標題 Disaster Archives and Sustainable Development: The Case of the Great East Japan Earthquake
3. 学会等名 1st Aceh Global Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Boret, Sebastien
2. 発表標題 An Innovative Disaster Digital Archive System
3. 学会等名 Global Risk Forum, Davos, Switzerland (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hayashi, Isao
2. 発表標題 Remembrance and Recording of the Great East Japan Earthquake Disaster
3. 学会等名 23rd 'Science in Japan' Forum (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林 勲男
2. 発表標題 災害記録の発展的継承を考える
3. 学会等名 東日本大震災アーカイブシンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松岡 正子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 464
3. 書名 資源化される「歴史 - 中国南部諸民族の分析から」 長谷川 清 河合 洋尚（編）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育 https://www.r.minpaku.ac.jp/isaki/large/index.html</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 翔輔 (SATO Shosuke) (00614372)	東北大学・災害科学国際研究所・准教授 (11301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石原 凌河 (ISHIHARA Ryoga) (00733396)	龍谷大学・政策学部・准教授 (34316)	
研究分担者	定池 祐季 (SADAIKE Yuki) (40587424)	東北大学・災害科学国際研究所・助教 (11301)	
研究分担者	阪本 真由美 (SAKAMOTO Mayumi) (60587426)	兵庫県立大学・減災復興政策研究科・教授 (24506)	
研究分担者	ボレー セバスチャン (BORET Sebastien) (70751676)	東北大学・災害科学国際研究所・准教授 (11301)	
研究分担者	齋藤 千恵 (SAITO Chie) (80387943)	金沢星稜大学・人文学部・教授 (33301)	
研究分担者	松岡 正子 (MATSUOKA Masako) (70410561)	愛知大学・現代中国学部・教授 (33901)	削除：2020年2月10日

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 2020 International Forum on Telling Live Lessons from Disasters	開催年 2020年～2020年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------